

## Ch 3. Causal and Meaning-Based Explanation

Kashima Y. (2014). Causal and meaning-based explanation. In , B. Gawronski and G. V. Bodenhausen(Eds). *Theory and Explanation in Social Psychology*, pp.41-62 Guilford Press.

発表者：小森めぐみ（四天王寺大学）

- ・ 社会心理学では「複数の出来事がどのように因果的に結びついて行動を生じさせるか」を説明することに焦点があたってきた。
- ・ しかし、社会心理学のさまざまな領域において、これとは違う形の説明—意味に基づく説明(meaning-based explanation)—が増加してきている
  - 文化比較研究、プライミング、意図と行動の関係の研究
  - これらの研究では、実験的記号論(experimental semiotics, Kashima & Haslam, 2008)と呼ばれる実験的（疑似実験的、相関的な場合もある）な意味の解説が行われている
  - 意味に基づく説明と因果に基づく説明を混同すると、理論が行き詰ってしまう
- ・ 本章では、意味に基づく説明の内容、その歴史的背景、二つの説明の混同をもたらす危険、社会心理学において両者を区別する潜在的利益について述べる<sup>1</sup>

### Meaning in Social Psychology

- ・ 人間の社会性は意味に満ちている(Holtgraves & Kashima, 2008).
  - 一人の少年が片目をパチパチさせていたとする(Ryle, 1971)。それを見たあなたの反応は、その行動をどう意味づけるかに応じて変わる(Geertz, 1973)
    - ◇ 顔面神経症の症状である場合→気の毒な少年をかわいそうに思う
    - ◇ ウィンクを試みているがうまくできていない場合→大人ぶっている少年に微笑む
    - ◇ 顔面神経症患者のまねをしている場合→悪ふざけをしている少年に説教する
  - このように、人間の社会的な関与を決定づけるのは運動そのものではなく、その意味
- ・ 言語使用場面では、これをよりはっきりと観察できる。誰かが以下のように言ったとする

**“先生の最近の論文を拝見しました。とても面白かったです。”**

  - 日本語がわかる人は、上の言葉の非発語行為＝その言葉のもつ意味に反応し、なぜその人がそのような意味をもつ行動をとったのかを説明しようとする
    - ◇ 彼はなぜ 論文を賞賛したのか？/おせじを言ったのか？/おべっかを使ったのか？
- ・ 日常生活で他人の行動の意味を目標やパーソナリティなどの概念で説明しようとするように、社会心理学でも意味をもった社会的行為を中心的な説明対象とすることが多い
- ・ 社会心理学の歴史の中で、意味への気づきは不可欠
  - Asch(1946)以降、社会的行為者が行う知覚は意味の構築としてとらえられている

---

<sup>1</sup> キーワード：標準モデル・因果に基づく説明・経験主義 / 記号論モデル・意味に基づく説明・解釈

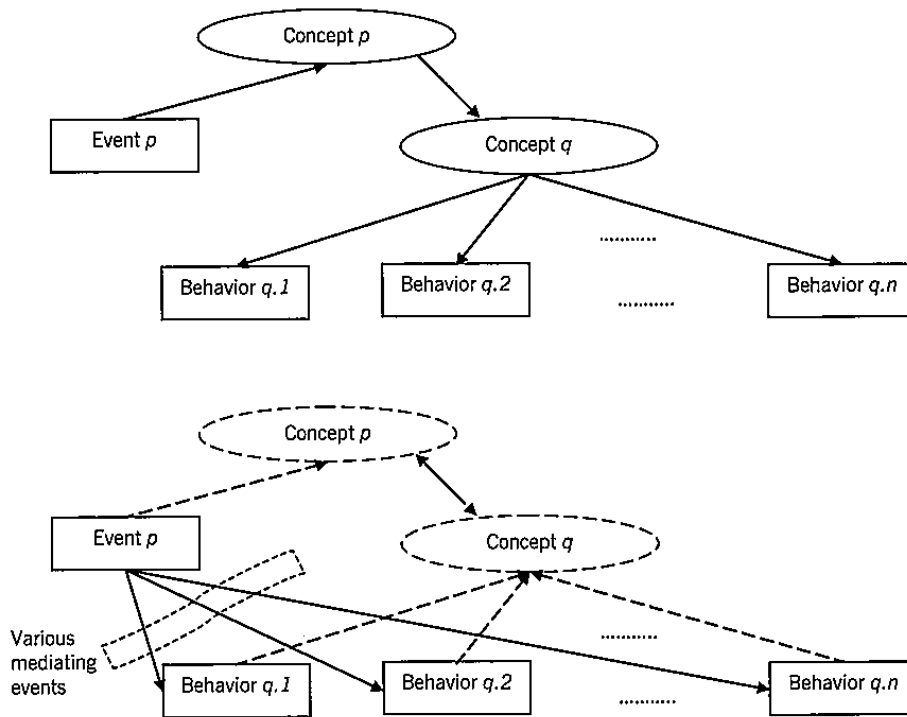
- Bartlett(1932)は記憶や認知を意味を追求する努力(effort after meaning)としてとらえる
  - Ross and Nisbett(1991)によれば、社会的行動の原因となるのは出来事そのものではなく、行為者による出来事の解釈という考えは社会心理学の基本的な前提
- ・ 意味づけは社会的認知だけでなく行為(action)を考えるうえでも重要
- Levin(1936)以降、社会心理学の動機づけ研究は行為を目的や目標で説明してきた
    - ☆ 動機づけられた行為についての理論は（ある行為が目標達成に貢献するという）期待や（目標のもつ）価値という観点から理解可能(Feather, 1982)
      - 合理的行動(Fishbein & Ajzen, 1975)、計画的行動(Ajzen, 1991)、意味づけの行為(Bruner, 1991)、意味を追求する努力(Bartlett, 1932)、実存主義の知的観点に基づく新しい意味の科学(Markman, Proulx, & Lindberg, 2013)
- ・ 意味は社会心理学的な文化の理解にも重要な役割を果たす
- Triandis(1964)は AESP 誌で、文化は集団内で間主観的に共有された世界の構築・作用方法であると述べている。これは集団内で共有された概念的な意味に類する言葉
  - 人類学者 Geertz(1973)も同様に文化を濃厚な記述によってのみ解説可能な意味づけのしがらみとしてとらえている
  - 知覚や行為の意味づけの社会心理学では、特定の意味が世代を超えて利用・構築・共有されるしくみを記述している。これが次々と世代を継いでいけば文化となる (Kashima & Gelfand, 2012)。
- ・ 社会心理学はこれまでもこれからも意味に注目してきた。今後もそうしていくに当たり、意味づけに基づく説明を活用していく必要がしばしば出てくるだろう

### What is a meaning-based explanation?

- ・ 意味に基づく説明とは何かを理解するために、Kashima(2009)の心理学的説明の標準モデル・記号論的モデルを使う (Figure 3-1 参照)。
  - 出来事  $p$ 、概念  $p$ 、概念  $q$ 、行動  $q.1 \sim q.n$  があるとする
  - 行動  $q.1$  の生起が被説明項で、出来事  $p$  の生起が説明項。これは単純な if-then 宣言文で表現が可能

If $p$ , then $q.1$ .	$p$ : 出来事が起きる
$p$ .	$q.1$ : 行動 $q.1$ が起きる
Therefore, $q.1$ .	社会心理学の理論では、この式は確率の制約を受ける

- ・ 社会心理学の関心対象は意味をもつ社会的行為であるため、以下の前提を置く
  - 行動  $q.1 \sim q.n$  は概念  $q$  によって記述・解釈される
  - 出来事  $p$  は概念  $p$  によって記述・解釈される
- ・ このように考えると行動  $q.1 \sim q.n$  と概念  $q$  の関係、出来事  $p$  と概念  $p$  の関係は外延的 (extensional) で、概念  $p$  と概念  $q$  の関係は内包的(intensional)
  - 大まかに言えば、ある概念の外延はそれが指示する対象をあらわし、内包は他の概念との連合、相関、定義、解説といえる



**FIGURE 3.1.** Schematic representation of the standard (upper panel) and a semiotic (lower panel) representation of psychological theories. Solid lines indicate *causal* relations. Broken lines indicate *meaning* relations. In the lower panel, the parallel wavy dotted lines indicate that a variety of unknown mediating events may be occurring there, which provide the actual causal chains of events that connect event *p* and behaviors *q.1* to *q.n*.

- ・ 心理学的説明の標準モデルと記号論的モデルでは、心理学的概念 *p* と *q* に関して想定する外延・内包の性質が異なる
  - 標準モデルでは、出来事 *p*、概念 *p* と概念 *q*、行動 *q.1*~*q.n* は因果関係にある
    - ◇ 出来事 *p* が知覚者の概念 *p* を活性化し、それが知覚者の記憶内で連合する概念 *q* に広がって概念 *q* が活性化され、それを原因として行動 *q.1*~*q.n* のどれかが生起
  - 記号論的モデルでは、概念 *p*・*q* は理論家が出来事 *p* や行動 *q.1*~*q.n* を解釈・記述するためのもので、実際に知覚者に使用されたり活性化しているとは限らないと想定
    - ◇ 記号論的モデルでは概念 *p* や概念 *q* は出来事 *p* と行動 *q.1*~*q.n* の関係をわかりやすくするための理論的な要約であり注釈(gloss)
    - ◇ このモデルでは、概念 *p*、概念 *q*、出来事 *p*、行動 *q.1*~*q.n* は意味づけを基盤として結びついている
    - ◇ 社会科学のメタ理論的にはこの類の説明は解釈(interpretation)と呼ばれている
  
- ・ ここで簡潔な定義を述べておくと、意味ベースの説明とは、行動を解釈、記述するが必ずしもその原因とはならない概念を用いた行動の説明を指す。
  - 意味ベースの説明は因果的な説明になる場合もならない場合もある
  - 意味ベースの説明が与えられ、記号論的にそれが正しかったとしても、それが因果的な関係を示すとは限らない
  - 意味ベースの説明は因果を表さない場合でも社会的・文化的に利益をもたらす

## Meaning-relevant research in social psychology: Exemplars

- ・ 上記の定義を肉付けするために、社会心理学における意味に関連する研究を紹介する

### Cultural comparisons

- ・ Kashima and Haslam(2008)は Menon, Morris, Chiu, and Hong(1999)に基づいて、文化心理学における因果的説明と意味ベースの説明の違いの例を挙げている

あるプロジェクトで会議への遅刻や締切超過をくりかえし、そのたびに言い訳をするZ氏。周囲はZ氏に嫌気がさし、プロジェクトは脇道にそれていった。最終的にプロジェクトの結果は散々なものだった。これに対し Mr.West は「Z氏は自分の行動をもっと管理すべきだった」とコメントし、Mr.East は「プロジェクトグループでは助け合いが不足していて、内部の問題にうまく対応できていなかった」と述べた。

- Mr.West と Mr.East は自らの発話で Z氏 or グループを責めるという行為を行っている
- ・ Mr. West がアメリカ合衆国出身で Mr. East が中国出身だったとすると、彼らの個人または集団を責めるという発話内行為は個人主義／集団主義(e.g., Triandis, 1989, 1995)または相互独立的／協調的自己観(Markus & Kitayama, 1990)で説明できる
- ・ ただし、上記の説明は標準モデルに基づくか記号論的モデルに基づくかで変わってくる
  - 標準モデルでは、Mr. West の個人主義的価値観(→概念  $q$ )は個人の責任追及行動(→行動  $q.1$ )の原因
    - ◇ Mr. East と行動が違ったことは概念  $q$  を保持する程度(=アクセシビリティ、重要性)の差から説明可能
  - 記号論的モデルでは概念  $q$  は行動  $q.1$  の原因としてではなく、行動の記述・解釈のために使われる。
    - ◇ 個人主義の強さは社会心理学者が文化パターンを記述するために用いる解釈上の概念として扱われる。
- ・ どちらのモデルに基づいたとしても Mr. West たちの行動を予測することは可能だが、因果的な説明は必ず因果関係に言及するのに対し、意味ベースの説明はそうとは限らない
  - 個人主義／集団主義を因果として読むのであれば、Mr. West が個人主義的文化で生まれ育ったことは、彼が頭に概念  $q$  を思い浮かべることの遠因
  - 記号論的に読み解くのであれば、Mr. West の成育歴は理論的な注釈に過ぎず、これまでに起きた様々な出来事の集積で、個人間・個人内に分布している文化的表象を含むもの(Kashima, 2009)
- ・ この二つの考え方の違いは、文化の一貫性を示す証拠の欠如や文化を原因としてとらえた場合の証拠の欠如(Kashima, 2009により指摘)を説明可能
  - 相互独立/協調的自己観の潜在指標間の相関の欠如(Kitayama, Park, Sevincer, Karasawa, & Uskul, 2009)
  - 文化差を理論的に説明する概念の測度が、他の測度で見られた文化差を統計的に説明できない(Matsumoto, 1999; Nisbett, Peng, Choi, & Norenzayan, 2001)

- ・ 上記の知見は標準モデルからすると不可解だが、記号論的モデルからすると、これらの結果は不思議ではない
  - 標準モデルでは自己観のような概念  $q$  の活性化が行動  $q.1 \sim q.n$  の原因となると想定
  - 記号論的モデルでは概念  $q$  と行動  $q.1 \sim q.n$  の間に因果関係はないので、両者の間に相関や媒介はなくてもよい
    - ◇ どのみち、ほとんどの媒介変数は内在する概念をそのままとらえていない
  - このような関係のなかで文化差を統計的に説明する概念  $q$  の測度を探することは時間のムダかもしれない

### Priming as meaning-relevant research

- ・ プライミング研究でも意味が重要な場合がある。以下の仮想シナリオを参照

会社勤めの Ms.Cash は難しい問題に取り組むよう命じられた。優秀なスタッフが補助としてついたが、スタッフたちには他の作業もあるとわかっていた彼女はその問題に独力で取り組んだ。彼女のデスクには PC があり、ドル紙幣がとびまわるスクリーンセイバーが入っていた。彼女はスクリーンセイバーに注意を向けていなかったが、ドル紙幣が飛び回る間、助けを求めずに仕事をした。

- ・ Vohs, Mead, & Goode(2006)はさまざまなプライムや測度を用いたお金プライムが自立的な行動の可能性を高め、援助行動の可能性を低めることを示した。
  - 標準モデルでこれを説明すると、スクリーンセイバーを見ること（出来事  $p$ ）はお金概念（概念  $p$ ）をプライムし、その活性化が自立性（概念  $q$ ）に拡散して、助けを求めずに一人でやるという行動（行動  $q.1$ ）を引き出したことになる
  - 記号論的モデルでこれを説明すると、出来事  $p$  が行動  $q.1$  の原因となったとしても、その因果プロセスの中に概念  $p$  や概念  $q$  は含まれない。これらの概念は出来事や行動を解釈するのにつかわれる要約にすぎず、Ms.Cash の行動は概念  $q$  の実例にすぎない
- ・ 記号論的モデルが批判に耐えられる学説であるかを検証するために、標準モデルから導かれるもう一つのシナリオを考えてみる。この説明にお金や自己満足といった概念はなく、エピソード記憶の連鎖があるだけ

Ms.Cash はお金のスクリーンセイバーによって、子どものときに一人で難題に取り組んだことでもらった報酬を思い出して、現在の作業によりしっかり取り組むよう動機づけられた。

- このシナリオはシンボリックな記述を可能とするような高次元分析レベルの存在を前提とする(Kashima, Woolcook, & Kahima, 2000)
  - 分散型コネクションモデルのような下位の象徴的表象を仮定する場合には、更に異なるシナリオを構築する必要がある
  - 神経（または遂行；Marr, 1982; 本書第二章を参照）レベルで因果的な説明をしようとするのであれば、お金や自己満足といった特定の概念の活性化を特定することは困難
- ・ ここであげた説明（概念の活性化、エピソード記憶の活性化、準記号的分散表象、神経プロセス）同士に優劣はない。どのタイプの記述が適切かは検討課題に応じて変わる

- ・ 重要なのは、行動をプライミングで説明していても、因果関係を正確に把握しているとは限らないし、想定されている因果関係が実際に存在するとは限らないということ
  - プライミング研究の中には、媒介変数を探ることがムダなものもある
  - 媒介概念は、社会心理学者が問題を解釈するのに役立つ注釈に近い
- ・ Vohs らの研究で興味深いのは、プライミングが様々な行動を生じさせたという事実ではなく、お金にまつわる経験や概念により人々がより自己満足的に行動したという観察結果
  - お金と自己満足の間に見られる予想外の内包的（意味的）関連を知ることによって、人々は現代の社会生活におけるお金の意味を考え直すことになる
- ・ 意味ベースの説明や記号論的モデルはいわゆる「1プライム、多様な結果」(Bargh, 2006; Balota & Paul, 1996; Barsalou, 1982)問題のヒントともなる
  - 敵意関連概念の単語への接触は、銃の同定を早め、他者に対して敵意的な印象を抱かせ、より敵意的な行動をとらせる(Loersch & Payne, 2011)
- ・ 記号論的モデルから考えれば、与えられたプライムが状況に応じて異なる解釈につながることは不思議ではない。それは多義語の意味が文脈によって明確になるのと同じこと。
- ・ プライミングの効果は人々があるがままの状態の行動の中でプライムをどう解釈するかに応じて変わるともいえる。最近のプライミング理論はこの観点から議論されている(e.g., Cesario, Plaks, & Higgins, 2006; Kay, Wheeler, & Smeester, 2008; Loersch & Payne, 2011)
  - これらの理論では、プライムされた出来事が何らかの心理的表象を生み出し、それが他の心理的表象と一緒に処理されて観察された行動を生み出すことを前提とする。
  - こうしたプロセスはプライムと行動を因果的に結びつける出来事だとされている
- ・ この点において、意味ベースの説明と因果的説明は重なり始める。つまり、知覚者が構築する意味（表象）が因果的説明の一部となる。
  - 知覚者の意味づけと理論家の意味づけの重なりが大きい場合は、意味に基づく説明は因果的な説明にかなり近いものになる。
  - このときには両者が意味や文化を共有していることを気に留めておく必要がある
- ・ そうだとしても、標準モデルと記号論的モデルを区別することは、理論のどの部分が認知の因果的な物語を占めているのかを明確にするために重要
  - Loersch and Payne(2011)のプライミング理論では、プライミングは心理的な反応を引き起こすが、誤帰属され、状況にアフォードされた質問への回答に用いられる
  - この因果的な説明は、何らかの自己概念と質問の投げかけが因果プロセスに含まれていることを前提としているように感じられるかもしれない。
  - しかし、どれが実際に生じ、どれが注釈なのかという疑問が生じてくる。答えをどう考えるかに応じて、理論の検証の方法は異なるだろう。
- ・ 研究者たちは研究者コミュニティにおいて自分の理論を他の研究者に伝える必要があるため、二つのモデルの区別は重要となる

- ・ まとめると、概念のプライミング効果研究では、プライムと行動の因果関係より、プライムと行動の間の意味のある関連を明らかにすることに重点が置かれている。
  - お金(Vohs, et al., 2006; Zhou, Vohs, & Baumeister, 2008)、相互独立と相互協調(Brewer & Gardner, 1996; Trafimow, Triandis, & Goto, 1991)、自由意志(Vohs & Schooler, 2008)、あたたかさ(Williams & Bargh, 2008)、mortality (Greenberg, Pyszczynski, Solomon, Simon, & Breus, 1994)
  - William and Bargh(2008)の研究で我々が驚かされるのは、一杯のコーヒーの温かさがメタフォリック（隠喩的）に対人間の温かさにつながるということ

### Action theories as meaning-relevant research

- ・ 行為理論は社会心理学の中でもっともよく知られ、生産的な研究分野
  - 合意的行為理論(Fishbein & Azjen, 1975)
  - 計画行動理論(Ajzen, 1991)
  - 実行意図理論(Gollwitzer, 1999)
  - イデオモーター理論(Prinz, 1997) などが含まれる(Greeve, 2001)
- ・ これらの理論には相違点が多いが、すべての理論の目標は行為が生成される際の心理的プロセスを解明することで、行為を概念化するにあたり意図性に注目している

オペラ好きなトスカ婦人は街でブッチーニの新しいショーについて聞いた。スケジュールをチェックしたところ、今週の火曜の夜にショーがあることがわかったので、火曜にオペラにいこうと意図した。そして火曜日になると、トスカ婦人は様々な運動行動を行った。その中にはオペラを見るという行動以外にも、ドアから外にでる、運転する、オペラハウスの近くに駐車する、仲間たちといっぴいやりながらおしゃべりするなど様々な行動が含まれていた。

- ・ トスカ婦人のオペラにいこうとする意図は、予想外の出来事の妨げがなければ、トスカ婦人の実際の行動を予測すると考えられている。彼女の行動の中にはオペラを見ることに直接関係しないものもあったが、彼女のオペラへ行こうとする意図と意味的には関連
  - これを Fig3-1 で考えると、意図は概念  $q$ 、行為は行動  $q.1-q.n$ 。
- ・ 標準モデルでは、この二つの間に因果関係があるとされるが、この概念化には有名な哲学的問題が付随している。
  - 特定の行為はふつうその行為を行おうとする対応する意図の存在によって定義される
  - 「火曜日にコンサートへ出かける」という行為は、行為者が「火曜日にコンサートへ出かける」という行為を実行しようとしている」という事実によって定義される。
- ・ 意味をもった行為を行動的な用語のみで定義しようとする行き詰まる(Greeve, 2001)。
  - 今のところのコンセンサスとしての行為と行動の違いは、行為はそれに対応し、その行為を実行しようとする意図と論理的につながっているという点
- ・ 意図と行為の間の論理的なつながりは因果関係について論じる際の問題となる。
  - これは経験主義の教義の一つ(Quine, 1953)で、因果性は論理的必然性であるべきではなく、原因と結果の間には論理的な関連があるべきではないというもの。

- しかし、ある行為が定義上で対応する意図を必要とするとしても、そこでの意図と行為の関係は論理であって、因果ではない(Quine, 1953)
- Quine(1953)の考えに基づくのであれば、意図は行為の生成の因果的な説明を提供しないが、意図は意味ベースの説明を提供する。
  
- ・ 意図は意味ベースの説明を提供するが因果には言及できないということは、行為理論の実証研究を不当・無意味呼ばわりするものではない
  - Greve(2001)は計画行動理論を使った典型的な研究をリフレーミングした
  - 問題なのは意図が行為を引き起こしているということではなく、現在の行為における意図を予測できる事前の意図の測定
  - ここでの中心的問題は、意図の安定性と測定手続きの妥当性
  
- ・ さらに Greeve(2001)は、この研究におけるクリティカルな問いは、行為や意図に提供された理由が実際に行為や意図を引き起こしているのかという問題であると指摘。
  - これは期待価値モデルに基づく様々な行為理論(e.g., Feather, 1982; Shah & Higgins, 1997) が取り組んでいる問題である。
  - どのように事前の意図が形成され、行為に訳されるのかという問題は、実行意図やイデオモーター理論の研究が取り組んでいる。

### Other examples of meaning-relevant research

- ・ 因果ではなく意味に注目している社会心理学の研究はほかにもある
- ・ しろとう理論(さまざまな領域における人々の素朴な理解)の研究はその好例
  - 物理学(Krist, Fieberg, & Wilkening, 1993; McCloskey & Kohl, 1983)
  - 生物学(Atran, 1998; Medin & Atran, 2004)、心理学(Malle, 2004)、人間性(Haslam, Loughnan, Kashima & Bain, 2008)、人種(Hirschfeld, 2001)、ステレオタイプ(Fiske, Cuddy, Glick, & Xu, 2002)、社会変化(Kashima et al., 2009)
  - 固定的/増大的理論(Dweck, Chiu, & Hong, 1999; see Dweck, 2012)、文化本質主義(Bastan & Haslam, 2006; Dar-Nimrod & Heine, 2011; Medin & Ortony, 1989)
  
- ・ これらの研究では、特定の領域の知識や行動へのインプリケーションに関する人々の認知的表象の内容を明らかにしようとしている。
- ・ 集団に共有され世代に受け継がれることを考慮すると、これらは集団の文化の一部
- ・ 議論はあるかもしれないが、急成長している実験哲学の研究もこのカテゴリーに属する。
  - この領域では出来事の因果的説明ではなく、概念が内包する意味の解説が行われる。



例：サイドエフェクト効果(Guglielmo & Malle, 2010; Knobe, 2003)

Mr.Bad 社長が、ある方針が副次的に環境にダメージを与えることを知りながらその方針をとったとしたら、彼は意図的に環境を傷つけたといえるか？Mr.Good 社長が、ある方針が副次的に環境を守ることを知りながらその方針をとったとしたら、彼は意図的に環境を守ったといえるか？

- 人は道徳的に賞賛される行動をとった Mr.Good よりも、道徳的に望ましくない行動をとった Mr.Bad に意図を帰属しやすい
- ・ 道徳の標準モデルから考えると、ある行動を意図的にとったかどうかは、その行動の道徳性を決定づける。しかしサイドエフェクト効果の知見は、意図性の判断自体が道徳性に左右されることを示している
- サイドエフェクト効果が実際にあるかどうかに関しては論争があるが(Knobe, 2003; Guglielmo & Malle, 2010<sup>2</sup>)、この研究が現代の discourse における意図の意味に関する研究であることは明らか

例：Hardisty, Johnson, and Weber(2010)

- この研究では、民主党支持者/共和党支持者/無党派層が、炭素税/炭素オフセット<sup>3</sup>の金額が加算されている製品やサービスに対してどう反応するかが調べられた<sup>4</sup>。
- その結果、炭素オフセットが加算されている選択肢に対しては、政治的志向性に関わらず選択率は変わらなかった。しかし、同じ金額が炭素税として加算されている場合には、共和党支持者と無党派層が製品の選択率を下げた。
- ・ アメリカの政治状況に詳しくない者にこの結果を理解させるには、それぞれの概念の意味について長々と解説しなければならないだろう。
- ・ これらの例は、内包された意味を明らかにしたり、それを使って結果を解釈しようとする試みである。このようなケースでは意味ベースの説明が生じやすい。

## Summary

- ・ 標準モデルでは出来事や概念のあいだに因果関係を想定するのに対して、記号論的モデルでは概念を解釈するのみである。記号論的な感覚における意味ベースの説明が心理学の理論に使われるようになれば、これらの理論は理論のもつ機能である記述、予測、データの解釈を可能にする。しかし、もっとも重要な機能である因果的な説明はこれらの理論ではまかなえないかもしれない。二つの理論を混同することはまちがいである。それによって、実在しない媒介要因の探索に時間を費やしたり、実際にはまだわかっていないにもかかわらず因果関係がわかったという誤解に陥りうる。

<sup>2</sup> Guglielmo & Malle(2010)はサイドエフェクト効果は従属測度が二分法的だったために出たと主張

<sup>3</sup> 炭素税は自動車など二酸化炭素を排出する対象に課される税金のことで、炭素オフセット(カーボンオフセット)は自らのやむを得ない二酸化炭素の排出を他者の二酸化炭素排出を削減する試みに協力することで自発的に相殺しようとする制度のこと。いずれにせよ追加の支払いが必要とされる。

<sup>4</sup> アメリカでは炭素税の導入はあまり好まれていないが、炭素オフセットは歓迎されている。また、共和党は特に税金に対するイメージが悪い(元論文より)

### History, meaning, and experimental semiotics

- ・ 意味ベースの説明や研究が社会心理学で普及しているにもかかわらず、あまり認識されてこなかったのはなぜなのか？
- ・ 知的な心理学研究の歴史をふりかえると(Kashima, 2000; Kashima & Gelfand, 2012)、ヨーロッパの文化史にはしばしば対立する二つの思考の伝統が存在していた。
  - 啓蒙思想の伝統：Locke、Humeに代表されるイギリスの経験主義<sup>5</sup>
    - ◇ 人間＝ニュートンの宇宙の一部。因果関係などの自然法則を重視
    - ◇ 自然科学を知識獲得のモデルとしてとらえ、方法論として経験主義を支持
  - 反啓蒙思想：ロマン主義の伝統を引き継ぎ知性を重視。Vico, Herder など。
    - ◇ 人間＝考え、感じ、文化や社会を構築できる知的な存在
    - ◇ 人間の産物である文化や社会は人間のメンタリティで説明するべきと考え、ニュートンの宇宙から人間を分離させた。
    - ◇ テキスト分析などの解釈学に基づき文化や社会的産物のもつ意味の把握を志向
  - 意味ベースの説明は反啓蒙主義の伝統と重なり、これを心理学における正当な検討トピックとして認めるかどうかは、心理学に反啓蒙主義を受け入れるかに依存する
- ・ 二つの思考の伝統は心理学の歴史の中でどう展開されてきたのだろうか？二つの考え方が如実に現れているのは Wilhelm Dilthey の研究
  - Diltheyによると、人文科学と自然科学の違いは、前者が検討対象の共感的・直感的理解(了解；*verstehen*)を目指すのに対して後者は因果的な説明を目指すところ
  - 共感的・直感的理解が可能なのは人間の行為や産物に対してのみで、自然現象は因果的にしか説明できない
  - 共感的・直感的理解にはわれわれが人間の意図と呼ぶようなもの(信念、欲求、幸福、恐怖、意図など)が含まれている。
  - 心理学の創設者 Wilhelm Wundt も早期には実証的な研究を行っていたが、晩年にはより言語やシンボルの解釈を行うようになっていた
- ・ メインストリームの心理学は自然科学のモデルを好んできた
  - Wundt は *volkerpsychologie* を検討課題としてあげていたが、Titchener は自分の理論からそれはずした
  - 行動主義の研究は心の概念を避け、意図性を人間活動の中核に据えていた文化的科学モデルにとって、心理学の知的環境を居心地の悪いものにしてしまった
  - この問題は 1970 年代に *JPSP* 誌で Kenneth Gergen (文化科学モデルを標榜) と Barry Schlenker (自然科学モデルを標榜) によって議論されている(Kashima, 2005)
  - 社会心理学者は意味を持った人間の行動に注目していたが、意味そのものや意味ベースの説明がその中心的議題となることはなかった
  - このような抵抗が起きた原因の一部は、研究の方法論(実験的手法を使う自然科学モデル、質的方法を用いる文化科学モデル)をめぐる問題
  - Gergen-Schlenker の論争は、社会心理学における質的研究の方法論にも言及しているが、この流れは認識論をめぐるやっかいなディベートになってしまった。

<sup>5</sup> 知識の源泉を感覚的経験に求める立場。人間の理性のはたらきを重視する合理論に対立する(山川出版社倫理用語集 p.98)

- ・ 結局心理学のメインストリームは経験主義を第一の方法とすることにこだわり、文化科学モデルは周辺に追いやられた。環境が変わり始めたのは1980~90年代になってから(Kashima & Gelfand, 2012)。
- ・ 社会心理学の理論が意味について何も言ってこなかったわけではなく、暗黙のうちに意味に言及していたものも多い
  - 1950年代、60年代の認知的一貫性理論は、狭い意味ではあるものの、認知的要素の意味の概念的な一貫性を問題としていた
  - 社会的認知研究では、スキーマ(概念、表象など)の一貫性や非一貫性が扱われていた。たとえばステレオタイプを理論化するにあたっては、ステレオタイプの意味を考えることは不可欠である
  - 社会心理学者がプロセスや内容に言及するとき、そこでいう内容とは意味のことである。ステレオタイプの内容モデルが好例

### Concluding remarks

- ・ 社会心理学は意味をもった社会的行為を説明しようとしてきたが、その説明は意味ベースであることが多かった。これを表だって認めることで、社会心理学は研究方法や因果の媒介要因などの論争から解放される
- ・ それに代り、社会心理学は実験的記号論(Kashima & Haslam, 2008)を正当な研究プログラムとして認めることができる
  - 方法論的経験主義とメタ理論的な意味の受容の統合
  - これにより、驚くような洞察を意味豊かな世界に加えることが可能になる。そのアプローチの一つが異文化研究
- ・ 加えて、社会心理学はプライミングなどの実験的手法を使ってしろうと理論やその効果をシステムティックに検証できるし、意味を質的に検証することで理論的洞察を導き出せる
- ・ 誤解を防ぐために、以下の二点は強調しておきたい
  - “社会心理学は因果的な説明を追求すべきでない”と言っているわけではない。社会心理学では意味ベースの説明が行われていることも多く、それを因果的な説明とこの字するのはまちがいだと指摘しているに過ぎない
  - “意味ベースの説明は決して因果ベースの説明にならない”と言っているわけでもない。“意味ベースの説明が因果ベースの説明になるとは限らない”のである。適切に構築されれば意味は社会世界の因果的な物語の重要な部分となる(Kashima, 2009)
- ・ 社会心理学が意味ベースのアプローチを正当な研究プログラムとして表だって認めて受容し、量的方法論と質的方法論とを完全に統合することで、心理学が陥っていた極性化した自然的 vs. 文化的科学モデルの構図から脱却し、新しいパラダイムを得て科学に新しい地平をもたらすことが著者の希望である。